「研究経営における学術出版―― 一つの事例報告」

酒井泰斗（会社員、ルーマン・フォーラム管理人）

報告者はここ 10 数年ほど、一人の社会学愛好者・享受者として、いくつかの学術出版に携わるとともに、数多くの研究会の運営や学術イベントの企画立案と開催運営に関わってきた。集合的な社会的活動としての学術研究にとって、出版はそれを支える基本的なインフラであり、多くの研究実践はそれを中心とするかたちで組織される。さらに特に人文社会系の研究においては学術雑誌以外に書籍の出版が重要な位置にある。本報告では、著者がこの間に行ってきた活動を振り返りつつ、それらを行うさいに、

①研究活動と出版の関係をどのようにとらえた上で

②どのような点に留意しつつ

③何を目指してきたか

を――特に『ワードマップエスノメソドロジー』（2007、現７刷）と『概念分析の社会学』（2009、現５刷）を中心にして――回顧的に報告してみたい。

報告者は、集合的な研究活動への部外者によるこうした介入的な関わりが可能だったのは、おそらくこの同じ時期に多くの部門で研究費が削減されるとともに学術出版がさらに厳しい局面を迎えたからだろうと想像している。私自身のささやかな経験が、厳しい環境にある研究あるいは出版に携わる方にとって多少なりとも何らかの参考になればと思う。